
とある普通の能力少年。

空丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある普通の能力少年。

【Nコード】

N3176BA

【作者名】

空丸

【あらすじ】

【考察】上条当麻が幻想殺ではなく普通の能力を持っていたら。

インデックスは絶対防御の服を壊されることなく、

御坂美琴の電撃は上条に通じ、

上条さんは無能力者と笑われることもない。

そんな世界（上条さんは若干チート）の物語、ご覧あれ。

前書 前回のおさらインデックス と後書 こたつの上にインデックス が本編より長いと気づきました。本編を読みにくいかもしれませんが許してくださいインデックスm（。・ε・。）m

プロローグ〜猛暑〜（前書き）

禁書の二次小説です。

以下無理な人は見ないほうがよかれ。

- ・書き殴り無理な方
- ・禁書愛しまくって原作以外は許せん方

以下好きな方は見て。

- ・主人公がチート
- ・神裂さん好き
- ・矛盾あっても面白ければok

ブローグ〜猛暑〜

とある魔術の禁書目録

×

空丸 妄想

「とある普通の能力少年」

〈LOST THE IMAGINE BREAKER〉

〈ブローグ〉

季節は夏。

能力開発を目的として科学の粋を集めた『学園都市』にも、逃れようのない熱気が訪れていた。

「はぁ・・・、熱い・・・」

第七学区の学生寮もちろん例外ではない。安い賃貸マンションであるため、資材に断熱効果を施している可能性は極めて低く、エアコンを使用しない限り部屋は蒸し風呂状態になる。

「・・・み、水・・・」

まるでウニみたいな頭髮だな。と、クラスメイトから馬鹿にされるツンツン頭もうなだれ、上条当麻は気だるい表情で冷蔵庫を開けた。

そこには先週買いこんだ食材があるだけで、ドリンクと呼ぶにふさわしい水分は存在しない。

「ふ、不幸だ・・・」

コップを取り出し、水道水を入れるも熱湯が出続けるだけで目的を果たせない。

「くっ、仕方ない。布団でも干してジューズ買いに行くか」

毎日布団を干しなさい。それが、彼の母親の唯一の言いつけであり、彼の守る唯一の決めごとだ。

敷布団とタオルケットを抱えると、右足でガラス戸をあける。少年に防犯の意識はなく、ガラス戸に鍵はかけていない。

「ふー、エアコンつけてないと外のほうが涼しいかも・・・な」

ベランダに出ると、そこには白い布がかけてあった。

純白の布は日差しを浴びて輝いており、それが高級な品であると布の知識が皆無である彼でもすぐに理解できた。

「え、えーつと、・・・上の階から落ちてきたの・・・か・・・なっ!？」

拾い上げようと手を伸ばした瞬間、それは生物のようにもぞもぞと動いた。

——否、生き物だった。中身の話だが。

その“生き物”の先端が折れ曲がり、エメラルドに光る虚ろな瞳がこちらを曖昧に捉えた。

折れ曲がった反動で銀髪が水のように流れ、ベランダの床まで届く。透き通るような白い肌をしており、それが人間——とても美しい少女だと認識するのに、上条は多くの時間を必要としなかった。

「……あのー、どちら様でしょう?」

日本語は通じるのか、滑り落ちないのか、なぜここにいるのか、さまざまな疑問と質問が生じる中で、上条は日本人として恥じない規範的行動“身分の確認”を試みた。

——しかし、少年の思考はあっさりと瓦解する。

「……ご飯を食べさせてくれるとうれしいな」

「日本語で……、しかも話を聞いてくれない」

がつくりとうなだれつつも、上条は少女を抱き上げた。

想いと願いが交差する時、『物語』は始まる——。

第一章『歩く協会』

第一章『歩く教会』

「ふもっふもっ」

「・・・・・・」

「ふもっふもっふもっ」

脱水症状を起こしかけていたことをすっかり忘れ、ウニ頭の少年“上条当麻”は銀髪少女を机越しに見つめていた。

少女はとても幼く見えたが、外人と接することが初めての上条には少女の年齢を推定することができない。自分より年下なのだろうと決めつけ話を切り出す。もちろん初対面の相手には敬語だ。

「・・・で、あなたは どうしてベランダなんかにつかかっていたのでしょうか？」

「ふもふもふもふもっ」

よほど腹が減っていたのだろう。頼いっぱいに野菜炒めを詰め込んだまま少女は何かを喋っている。

「まあ・・・後でもいいか」

結局、何度もおかわりを催促され、料理を作り足すこと10品目。買いこんでいた一週間分の食料を全て消費した時には、少女は満面の笑みで感謝の言葉を述べた。

「見ず知らずの私なんかのために料理を作ってくれて本当にありがとうなんだよ。この国は他人に冷たいと多くの記録が述べてるけど、そんなことはなかったんだよ」

えへっ。と破壊力抜群な笑顔を見せられ、いや魅せられた上条は再び先ほどの話を切り出す。

「え、えーっと、君が誰なのか、そしてなぜうちのベランダに引っかかっていたのか、できれば馬鹿な上条さんにご教授願いたいんですけど」

少女は表情を曇らせ、そして少し辛そうに答えた。

「それはね、・・・逃げてたんだよ」

逃げていた。とても現実味のない言葉。

「鬼ごっこかなんかしてたのか？」

遊びのイメージから急に年下感が強まり、上条はため口になる。しかし、少女は首を横に振ると、

「うっん、違うんだよ。本当の意味で追われてたんだよ」

本当の意味で。少女は続ける。

「私が何に追われて、何から逃げて来たのか。それは聞かないほうがいいんだよ。それより、ご飯のお礼がしたいんだよ。なんでも言うてほしいかも」

後半のまくし立てるような言葉は、前半の深追いを拒絶していた。上条もそれを理解して、質問を変える。

「あ、ああ、お礼なんて良いんだよ。それより、名前を教えてくださいませんか？」

お安いご用なんだよ。少女に笑顔が戻る。

「私の名前はインデックス。イギリス清教所属のシスターなんだよっ」

上条当麻は後悔した。外国少女の笑顔の素晴らしさを知らなかったことに、日本人に生まれたことに、そして何より先ほど見せた少女の闇を取り除こうともせず諦めたことに。

「インデックス？　って本の目次？」

にわかには信じられない名前だったが、外人の名前の知識などなく、それが冗談なのか本気なのか上条には判断できない。

「禁書目録って言って・・・って、そんなことはどうでも良いよね」

言葉を濁す。上条はもどかしさを押し殺し、違う質問をした。

「インデックスはシスターとはいえ暑くないのか？」

素材は分からないが、手が隠れるほど長い袖に、地面をするほどの長さをもった修道服。見ている側が暑くなるような服装だ。

「ふふーん、これはね“歩く教会”って言って魔術によって結界が施されてるから暑くも寒くもないんだよっ」

胸を張るインデックスに上条は苦笑いで答えた。

「あー、駄目ださういうの。ベランダにいたから尋常な理由じゃないことは分かるけど、魔術とか歩く教会とか、科学の世界で生きる俺にはとてもついていけません」

両手を挙げ降参のポーズをとる。

「むむむっ、とーまは理解できてない“あるのだからあるのだろう” 科学は信じて、見たことないからって“あるかもしれないある” 魔術は信じないんだねっ」

さりげなく馬鹿にされていることに上条は気付かない。もちろんインデックス本人も自覚していない。

「んー、だって科学の恩恵は受けてるけど、魔術の存在を実際に見たことないし・・・まあ、俺の能力も幻想を現実化するって意味では魔術みたいだけだな」

「・・・何それ？ 魔術名も儀式もなしにそんなことができるの？」

きょとん、と目を丸くして質問するインデックス。

「ああ、科学の力だからな。脳が演算してるからそれが儀式に近いのかもしれないけど」

「へえ、にわかには信じられない話なんだよ」

お互いに相容れない幻想を抱えていることを理解し、幻想自体を共有することはあっさりと諦める。

「さて、と。そろそろ行かなきゃ・・・なんだよ」

インデックスは改めてお礼を述べると、そそくさと玄関へ向かう。

「お、おいインデックス。本当に一人で行っちゃうのか？ 追われるんだろ？・・・何だっ——」

上条の言葉を遮り、泣きそうな表情でインデックスは答える。

「とーまは・・・地獄の底まで一緒に飛び込んでくれる・・・かな？」

少女の絶望の端に触れた気がして、少年は歩みを止める。そして、それが答えだとばかりに少女は笑顔で、

「それじゃあ・・・なんだよ」

少女は駆け足で去った。

「・・・なんだよ、それ」

少年には汚れた食器と、少女の甘い香りだけが残った。

第一章『歩く協会』（後書き）

こたつの上にインデックス

禁「とーまとーま、ねえとーま？」

上「ん？　なんだインデペンデックスデイ」

禁「ムッ、とうまもこの世から独立させてほしいのかな？」

上「い、いえいえ、それでなんでしょう？」

禁「とうまつて原作じゃ幻想殺しって能力もってるんだよね？」

上「ああ、そうだぞ。どんな異能力でもぶち殺す優れ物だっ」

禁「その能力で私の服をひんむくんだよね？」

上「・・・・・・・・」

禁「その上でまだ幼くて可愛い私の裸体を鑑賞して興奮するんだよね？」

上「・・・・・・・・」

禁「とうまは本当は知ってて私の服を破いて襲いかかるうとしてたんだよね？」

上「幻想体現！ インデックスの記憶を消去！！」

禁「・・・・・・・・えつと何の話だっけ？」

上（・・・・ふう、歩く協会越しても効いて良かった）

禁「思いだしたんだよ！　とうまが原作で短髪とデートしてた話なんだよ！！！」

上「ふ、不幸だああああ！！！」

あとがき、完？

空丸「・・・・あとがきでもなんでもなくね？」

空蝉「そうですね。でも、これからもやってくんですよね？」

空丸「ああうん。こんな湧いて出たような小説を見てくれる人もいたしな」

空蝉「三人だけですけどね」

空丸「十分ですm（。・ε・。）m」

これからよろしく願いします♪

第二章『電撃×幻想』その1（前書き）

読みやすさ追求のために、章をさらに区切らせていただきます♪

ご意見感想あればどんどん来てください）、＊（

第二章『電撃×幻想』その1

ベランダから始まった異国の少女との交流が記憶に変わる昼過ぎ、ウニ頭の少年は学生服に身を包みとぼとぼと公園を歩いていた。

「・・・はあ、不幸だ」

スマートフォン画面を見ると、そこには担任からのメールが出ている。

『上条ちゃんは馬鹿だから補習でーす』

「生徒にメールする担任なんてあんたくらいだよ」

それは多くの人間の憧れでもあるのだが、当人が気づくことはない。

しかしながら、本来レベル4である上条当麻が、いくら筆記テストの結果が悪くても補習になることはない。

彼の通う学校にはレベル3以上は数人しかおらず、本来特待生として扱われてもおかしくないのだ。

レベル4【幻想体現】イマジンプレイク

幻想を幻想という枠組みから外し、現実に出す能力。

身体に関わる現象のみに限られるので学園都市に7人しかいないレベル5にはなれていないものの、小萌曰く『上条ちゃんはパーソナルリアリティさえしっかり持てば、どのレベル5よりも強くなれるですよー』

「上条さんは別にレベル5なんかには興味ありませんよーっと」

能力開発のために存在する学園都市において、能力の優劣は必然。その中で一番強く、便利で、貴重な能力者になりたいと願うのはごく当たり前のことだ。

しかし、上条にはいくばくの興味もない。

そのせいで今学期の能力テストは特に成長が見られなかった。そして結果を見た担任が成績の低い特別補習に上条も組み込んだのだ。

「……………ん？」

第七学区の公園は無駄に広い。

多くの生徒が利用しているのだが、上条の視界におおよそ公園でやることではない光景が飛び込んできた。

「なあ姉ちゃん。ちょっと面かせよ」

少女一人、男数名。

「・・・嫌よ」

少女を囲む男たちは大学生くらいで、その風貌からおそらくスキルアウト（無能力者）か能力を持った不良だと上条は判断した。

「常盤台のお嬢様がこんな所に一人でいるなんて、よっぽど暇なんだろう？」

下心なのかカツアゲ目的なのか分からないが、少女が絡まれているという状況だけは上条にも理解できた。

その時には一歩、踏み出していた。

「なあ、もし来てく「いやあ、ちよつとごめんなさいね」

男たちの会話を遮り、少年は少女の前に立つ。

「なんだてめえ!？」

男の一人が睨めつける。

「いやあ、こいつの連れなんですよ。さっ、行こうぜ」

上条は少女の腕を掴み、この場から離れようとする。

「何すんのよ」

少女は勇ましくも上条の腕を振り払い見事な仁王立ちを見せた。

その時、いたずらな風が公園を吹き抜ける。

少女のスカートの中はベージュの短パンだった。

ミサカ「・・・縞パンなら私達がいくらでも見せ付けてあげるのに、なんならはきたてほかかをプレゼントするのに、とミサカはストーカーのようにベランダから二人を覗いてます」

空丸「だぁ！ きみはまだ出てないから！」

ミサカ「・・・それは献体番号何番のミサカのことを指しているのでしょうか、とミサカは自己アイデンティティを主張します」

空丸「・・・俺の前にはお前しか映ってないよ」キラリン

ミサカ「・・・へっ、とミサカは既婚者に対して軽蔑の視線をぶつけます」

空丸「・・・ふ、不幸だぁ」

第二章『電撃×幻想』その2（前書き）

前回のおさらインデックス

上「とてつもなく不幸だけど、前向きに生きている健気な高校生上条当麻は、教師からの不条理な圧力に負けて、補習の参加を余儀なくされる。登校の途中、公園で少女が一人不良に絡まれていた！！トラブルごとを黙って見過ごせない人情厚い上条さんが一歩踏み出す！！少女は無事なのか！？上条当麻の安否は！？とある魔術の禁書目録異聞録』とある普通の能力少年』 お前らの幻想をぶっ殺す！！」

禁「とうまが短髪のスカート覗いて（；；；）ハアハアした後のお話なんだよ」プン

上「ふ、不幸だああああ！！」

第二章『電撃×幻想』その2

「お、お前なあ！！ 俺の鮮やかで華麗な作戦を不意にする気か！？」

「誰が頼んだっ！！ アンタなんかの世話になんないわよっ！」

「お、おいっ！ 俺らをシカトすんじゃねえよ！！！」

男の一人が上条の肩を掴む。上条はそれを思い切り振り払うと、口を開いた。

「お前らわかってんのか！？ 大勢でこんなガキ相手にして！」

「・・・ガキ？」

「見てみるよっ！ このふてぶてしい顔、態度！ 可愛らしさの欠片もねえじゃねえか！」

「・・・かけらも？」

「俺だったら少なくとも、もつと美人でスタイル良いお姉さんを狙うぞ！ だが、お前らみたいに数に頼った卑怯な真似はしない！ 一対一でせいせいど——」

上条は言葉を止めた。感じたことのない殺気がそこにあつたからだ。

「言いたいこと言ってくれるじゃないレベル4上条当麻。私の中の電気があんたを焼き尽くせって溢れだしてきたわ」

そう、上条当麻は少女を本心から助けに来た訳ではない。少女を助けるという形が一番誰にも被害を及ぼすことがなかったのだ。――しかし、それはもはや手遅れで、

「往生せえやごらあああああ!!!!!!」

少女――常盤台のEースにしてレベル5、通称【超電磁砲】（レールガン）こと御坂美琴は学園都市きつての電撃使いだ。そして放たれた電撃の総量は人を感電死させるには十分であり、

「ちっ!!!!」

少女の近くにいた男たちの身は危険極まりなかった。上条は舌打ちすると、右手の拳を強く握り込んだ。

そして彼は、電撃よりも早く動く自分を“幻想”した。思ったよりそれは簡単で、それを現実に出した時、男たちはすでに御坂美琴の電撃範囲外で茫然と立ち尽くしていた。

「相変わらず無茶苦茶だな。ビリビリ」

上条はウニ頭をかきながら呆れ顔で美琴を見た。

「あんま無茶してやんなよ。こいつらもお前がレベル5だなんて知ってたら絡もうなんて思わなかっただろうし」

それにお前も可愛い女の子なんだから。上条は心の中で述べる。

それを言わなければただの説教だとも分からずに。

「・・・相変わらず強者のセリフよね」

少女の肩に届くかどうかのショートヘアが電気で逆立つ。

「お、おいっ、俺はお前に絡む気なんてないぞっ！　ビリビリ！！」

少女はふふふっ、と笑うと、全身に力を込めて全力で電撃を放った。

「ビリビリ言うなーーーー！！！！」

無作為に放たれたように見えた電撃は一つの塊となって上条に向かった。

（くっ、電撃を受け止める自分を想像しろっ！）

上条の能力では物質を変化させることはできない。電気の流れを変えることも、避雷針を立てることもできない。あくまで“電撃に耐えることができる自分”を幻想し、それを現実を持ち出すのだ。

落雷したような大きな音が公園に響いた。

「つつっ、本気で撃つなよ、ビリビリ。誰かに当たったらどうするんだ？」

まるで自分は当たっても大丈夫かのような言い草に美琴は苛立ちをつのらせる。

「ほんとあんなってむかつくわっ!!」

連続で電撃を放つ美琴。三つの閃光は的確に上条を捉えている。

が、それが実際に上条に当たることはない。“雷より素早く動ける自分”を現実に出した時、彼はすでに公園から立ち去っていたのだから。

「・・・何よそれ・・・何よそれ!!!」

美琴の叫びも想いもまた、彼には届かない。

第二章『電撃×幻想』その2（後書き）

こたつの上にインデックス 【その3】

上「こんなぼんぼん更新して作者は大丈夫か？」

禁「大丈夫なんだよ！ 作者は執筆スピード“だけ”が得意なんだよ！」

上「・・・おそらく泣いてるだろうな」

禁「ところで、今回の話ってアニメの展開に似てるよね？ とうまが短髪の雷打ち消すところとか」

上「あー、原作では打ち消してるけど、この上条さんはただ我慢してるだけで、電撃もろに食らってるぞ」

禁「ええ！？ だ、大丈夫なのとうま！？」ナデナデ

上「あ、ああ、ご都合主義の作者だから大丈夫なんじゃね？ 物理的にいったら死んでるよ確実に」

禁「いや、でもそうとは言い切れないんだよ。落雷を浴びて死ななかった人ってけっこういるんだよ」

上「え？ そうなのか？」

禁「それでも、あんなすぐに動けるなんて不可能だろうから、やっぱり作者って“アホ”なんだね」ニコニコ

上「……………ドンマイ」

完？

とある屋台の愚痴空間

空丸「……………グスン」

姫神「おー、よしよし、バカなりに面白い展開考えたんだよね」ナ
デナデ

空丸「だって、異能力とはいえ、能力者の手から離れたらそれはただの現象だろ？それを打ち消せるなら幻想体現で耐えるくらいできてもいいじゃないか」ビエエエン

姫神「まあ、私が出ていない限り、どうでもいいんだけどね」ニコリ

空丸「……………じ、実は」

姫神「……………何かな？マジカルステッキの出番かな？」チャキ

空丸「って、それスタンガンだから！！怖いから！」ビクビク

姫神「早く言わないとマジカルステッキが誤作動しちゃうかも」ブ
ーン

空丸「なんかバ。ブみたいな動きしてるから！！・・・実は、このインデックス編が終わったら・・・」

姫神「私がヒロインの話が始まるんだよね？」

空丸「構想は二種類あって・・・」

姫神「ひとつが私を上条当麻が助ける王道ルート。もうひとつが私が当麻を助ける逆ルートだね？・・・きゃ、当麻って言っちゃった」テレテレ

空丸「ひとつが一方通行とガチバトル編で、もうひとつが上条当麻がジャッジメントをしていた過去の話（オリジナル展開）なんだけど・・・ぎゃあああああ！！！」

姫神「あ、ステッキが勝手に・・・ま、いつか」スタスタスタ

空丸「ふ、不幸だあ・・・ガク」

第三章『特別補習（戦闘シュミレーション）』その1（前書き）

前回のおさらインデックス

ビリビリ「ビリビリっばりっびりびりっびりびりピッピカ——」

美琴「だあああ！！　なんなのよ！　この摩訶不思議な生き物は！
？」

上条「・・・よく分らんがこのポ。モンの代表的生物みたいなのは俺の幻想が生み出した御坂美琴のイメージらしい」

美琴「・・・あんたのあたしに対する気持ちがよく分かったわ
ビリビリ

上条「ほ、ほらっ！　またビリビリしてる！」

ビリビリ「ピッピガチュウ？」

美琴「二匹まとめてぶつとびなさい！！！」　ドガン

上条「だあああ！！　不幸だあああ！！！」

禁書「みたいな展開だったんだよ」

第三章『特別補習（戦闘シュミレーション）』その1

「……………あえ？」

……気付くべきだったんだ。

上条当麻は後悔する。補習の指定場所が体育館だったことに。

上条当麻は嘲笑する。体操着を律儀に用意してたくせに普通の補習を想像していた自分に。

上条当麻は——茫然と立ち尽くす。

目の前で殺気をまき散らせる体操着姿の男達を見て。

「上条ちゃん、今日は特別補習の戦闘シュミレーションです♪」

同じく体操着姿の小萌先生の姿がそこにあった。小学生と言っても100人が100人とも信じるであろう容姿に男達の中の数人はそちらに熱意を向けている。

「上条ちゃんVSモテナイ男軍団です♪ いえーいどんどんぱっぱふ」

うおおおおお！ と、悲しみの雄叫びをあげる男達。ステージ上には女子生徒が男達を見て呆れている。

「上条ちゃんはそのヘタレ根性と向上心のなさを加味しても、うちの学校のエースであることは間違いありません。だからこうして無理やり能力の向上を図りますです」

「そんなことありませんので今すぐ帰らせてくだ「無理です」」

小萌先生が自分を特に気にかけていてくれていて、それがレベル4だからという理由でなく、“上条当麻”という人間を心配してくれていることは彼自身すごく感謝している。

しかし、こと自分のために戦うことが苦手な上条にとって、この状況はすごく燃費の悪い展開だった。

「どうせ上条ちゃんのことですから、『はあ、めんどくさい。帰ってエロ本でも読みたい。委員長ちゃんのおっぱい想像しながらハアハアしたい・・・』とか思っているのでしょうか？　そうは問屋がおりしません」

「いや、吹寄制理の胸は確かに超絶魅力的な豊満おっぱいだ、あいにく上条さんはクラスメイトを想像しながらハアハアする趣味はございませんことよ」

「・・・上条当麻。貴様というやつは」

ステージ上から強い殺気が上条を突き刺す。

「・・・・・・・・・・は、ははっ、委員長様おられたのですか？」

吹寄は無表情のまま上条を見下していた。それはクラスメイト（自分も含む）にとってご褒美であり、至極恐悦だった。

「吹寄ちゃんを含む、ここの女子生徒たちは上条ちゃんファンクラブなのですよっ」

「・・・・・・・・・・え？」「は？」

上条と吹寄の声がかぶる。

「冗談です」でも、多くの生徒は上条ちゃん的能力を見たくて集まってくれたのですよっ」

学園都市では珍しくないレベル4も、この学校に限定してしまえば、上条ただ一人しかない。興味レベルから真剣に勉強したくて集まった生徒達なのだろう。上条はため息交じりに口を開いた。

「・・・・たくっ、分かりましたよ。この上条さん、悩める未来の希望達のために一肌脱ぎましょう」

腰を落とし、軽く屈伸運動をする。上条の能力は状況によつては身体に負荷をかける場合がある（ほぼその場合なのだ）。だから、準備運動は念入りにおこなう。

「あ、上条ちゃん、言い忘れてましたけど、上条ちゃんが負けるとステージ上のか弱い女の子達はその荒れ狂う男達の毒牙にかかってしまいますからそこをこ頭に叩き込んでおいてくださいねっ」

「……………は「それではスタートです」♪」

禁「とうまはいつかウニに圧迫されて死ぬと良いんだよ」「ニコリ

上「・・・・・・・・・・不幸だぁ」

完？

空丸「おれがおっぱい好きなんて失敬な」

空蝉（久しぶりの出番・・・）「おっぱい嫌いなのですか？」

空丸「いやっ！ おっぱいを愛してるんだ！ おっぱいのために死ぬるー！！」

空蝉「いますぐ死んでください」ドゲザ

空丸「懇願！？ 悲願！？ 哀願！？」

空蝉「冗談です。私は一応ナイスバディクール忍者設定なので主人であるあなたになにされるか不安になったのです」ときどきー

空丸「カッコ外の感情が棒読みだよ！？ しかもその設定何！？ 中2なの！？」

空蝉「いえ、25歳です」キリリ

空丸「・・・・（´；ω；´）ウツ」

空蝉「ところでマスター。この話はオリジナル展開ですよね？」

空丸「ああ、バトル好き（主人公チート並みの強さ好き）の俺としては是非とも入れたかった話なんだ」

空蝉「つまり、この話が面白いかどうか、マスターのオリジナル小説（今後執筆予定）の面白さを決めるという訳なんですネ」

空丸「どうか本当に心の底から面白くなくても面白いと褒めてください」

空蝉「次回もザンサツザンサツウ」

空丸「惨殺しねーよ！？ 全年齢対象だよ！？」

完

第三章『特別補習（戦闘シュミレーション）』その2（前書き）

前回のおさらインデックス

禁「吹寄のおっぱいに興奮」

上「ちよちよ、インデックスさん」アセアセ

禁「吹寄の巨乳にハアハア」ズズイ

上（ま、まずい、このままじゃ俺のイメージが・・・）

禁「吹寄の淫乱な胸にもっ——」ドガッ

吹「・・・・・・・・・・」スタスタ

上「・・・・・・・・・・鬼がいた」

第三章『特別補習（戦闘シュミレーション）』その2

「・・・・・・・・・・は「それではスタートです」」

開始の合図と同時に、四人の男が前に飛び出した。

おそらく筋力操作系の能力だろう。

上条の能力に近いものがあるが、自分だけの現実が能力を左右する限り、筋力を強めるのにも限界がある。

（真正面からぶつかる自分を創りだせ！！）

上条の幻想は筋力を強化する訳ではない。あくまでそのままの自分が、“幻想”通りの動きを見せる。

四人の内、二人と正面からぶつかり、体育館に衝突音が響く。

「・・・よお、上条当麻。今日こそお前に勝つ」

「えーっと、何度か俺に挑んで返り討ちにあっちゃった先輩・・・でしたっけ？」

「うるせえ！！！！ お前がいなければこの学園のエースだった男だあ！！！！」

二人の男は左右に跳ぶ——それを割って入るように別の男が炎を

纏って飛び込んできた。

「うわぁぁぁぁぁ！」

炎を纏う・・・いや、火だるま状態の男は泣き叫びながら上条の横をすり抜けた。

「くっ、暴走かつ!？」

上条は迷わずその男の腕を掴んだ。

炎が上条に燃え移り、ステージ上では悲鳴が上がる。吹寄の目にも不安が見てとれた。

（炎は酸素を餌に燃えている。酸素を・・・いや、そうしたらこいつは窒息する。それならって、なっ!？）

「うぉぉぉぉぉ!！」

火だるま人間の影から木刀を持った男が跳びかかる。

空中を歩いているところから、足場を創る能力を持っていると上条は判断した。

「火だるま君、すまん!」

上条は火だるまの男を壁に投げ飛ばした。

火の能力者ならなんとかできるだろう。

・・・できなければ後で助けてやるからな。上条は心の中でつぶやく。

その一方、左手で振り下ろされた木刀を掴む。

“正確に威力を殺して掴みとる自分”を幻想したのだ。

普段から弱そうなレベル4として喧嘩を売られる上条にとって素人に毛の生えたような攻撃を受け止めるなどとても容易いことだ。

「隙あり!!」

後ろから声がした。

能力を判断することはできないが、決定打を繰り出していることは確かだ。

「食らうかよっ!!」

上条は能力を使うことなく、宙に浮いている木刀の男の下へ潜り、そのまま上空めがけて蹴りを加えた。

「かはっ」

木刀の男の叫びとともに、『ガッン!』と床を叩く音が響く。

先ほどの声の主は重さを変える能力を持っているのだろう、新聞紙を丸めただけの棒が驚くほど重たい音を発生していた。

蹴りあげた木刀の男を新聞紙の見た方向へ吹き飛ばす。『ぐえ』

と二重の叫び声が聞こえた。

そうしているうちに最初の四人が再び視界へ現れる。

一人は蹴りを、一人は拳を、一人は跳びかかり、一人はスライディングタックルを繰り出している。

「どいつも、こいつもありきたりな攻撃ばかりしやがって・・・」

上条はうんざりしていた。

男達から本気で勝ちたいという意思が感じられなかったからだ。

「この上条当麻を怒らせるなよっ！！！」

四人より早く動ける自分を幻想し、体現する。

スライディングタックルの男を踏みつけ、

蹴りの男の顔面に拳をぶつけ、

跳びかかってきた男を頭突きし、

四人目の男の拳を手で受け止める。

「ひ、ひいっ！」

男は床で失神している仲間たちを見て、悲鳴を上げた。

——そうじゃない、逆だろ。

「なあアンタ。男だったらさ、仲間がやられて悲鳴をあげるんじゃないく、その仲間のために拳を繰り出すだろ。じゃないと、誰がやられた仲間を助けるんだよ。お前が自分を守ってくれる仲間がいないと動けないっていうんなら、誰かの後でしか行動できないっていうんなら、まずは

——その幻想をぶち殺す!!!」

そして、上条当麻はただ一人、

体育館の上で立っていた。

「勝負あり！ 勝者上条当麻!!!」

小萌先生の高らかな勝利宣言とともにステージから黄色い歓声があがる。

「ふん、レベル4なんだから勝って当然だ。・・・だが、よく頑張ったな」

吹寄は満足そうに体育館を後にする。ここで上条を褒める自分など想像したくもなかったからだ。

その理由は彼のためであり、自分の気持ちは押し殺しているのだが、本人すらそれに気付かない。

「おめでとうなですよ、上条ちゃん」

小萌先生の極上の笑顔に祝福され、上条はまんざらでもなかった。

例えその後何が続いていようとも。

「それでは、これから補習なのですよ」

曰く、これは“特別補習”であり、補習の際に議題とする『パソナルリアリティ』の実践演習だという。

上条当麻は天を仰ぐ。——そして、

「不幸だああああああ！！！」

第三章『特別補習（戦闘シュミレーション）』その2（後書き）

こたつの上にインデックス

上「あー疲れたー」

禁「お疲れ様なんだよとうま」ナデナデ

上「オリジナルの展開って割にあつというまに終わっちゃったな」

禁「まあ、禁書編は駆け足で終わらす気にいるからね作者は」ブン
ブン

上「そういえばこのまえ届いた台本は『ビリビリ編』と『ジャッジ
メント編』って書いてたけどどっちをやるんだろっな？」

禁「そんなの『禁書編その2』に決まってるんだよ」エヘン

上「……………全部アドリブか？」

禁「勢いでどうにかなるんだよ」エヘン

上「……………不幸だあ」

完？

とある作者の未来予測

空丸「まあ、作者的にはジャッジメント編→一通編のほうがり上がると思ってます」

空蝉「ほう、それはなぜですか、マスター」

空丸「ジャッジメント編はなんと上条当麻がジャッジメントのエースとして活躍する話なのです！」

空蝉「ほう！ それはビアンカもマホカクタだね」

空丸「海外のテレビショッピンング風に言いたかったんだろうけど、それただのドラクエだから！」

空蝉「それでそれで、ジャッジメント編ってことは、白井や初春との濃厚かつ大胆な描写がバンバン飛び交うというのですね！？／／／／」

空丸「空蝉は俺の煩惱の塊だもんな。でも、中学時代だぞ？ 中学男子なんて、妄想しかできないヘタレの集団だぞ？」

空蝉「お前それヘタレ集団に囲まれても言えんのかよ？」

空丸「……助けてージャッジメントさーん！」

空蝉「……それでは次回もザンサツザンサツウ」

空丸「それ流行らないからね！？」

第四章『聖人』その1（前書き）

前回のおさらインデックス

禁「作者が寝ずに仕事に行ったら死にました」

上「それ読者に関係ないから！！俺の幻想体現が戦闘用に優れていることを乱闘で証明した回でした！！」

禁「……ら、らんこ——ブフェツ」ゴスッ

吹「……」スタスタスタ

上「キャラ崩壊……不幸だあ！！」

第四章『聖人』その1

「・・・不幸だあ」

第七学区のとある高校に通っているごく普通の高校生こと上条当麻は今まさにピンチを迎えていた。

——家に食材がないのである。

補習の疲れ（大半は特別補習のせい）と夏の暑さから、部屋から出る気にならない。

しかし、このままでは空腹で死んでしまう。

究極の二択を上条当麻はゴロゴロしながら悩まされていた。

「五時前か。いまならタイムセール間に合うかな」

「・・・な、なんだこれ」

行きつけのスーパー（卵が安い、とにかく安い）にたどり着いた上条は狼狽した。

このスーパーを通い始めて以来の人だかりが彼の行く先を阻んでいたからだ。

「あ、あのー、ちょっと失礼しますねー」

とにかく食材だけでも手に入れねば。

上条が人だかりを分け入るとそこには純白の布がすごいスピードで動いていた。

「・・・・・・・・・・あ？ インデックス？」

布の中の人は間違いなく朝ベランダに引っかかっていた少女だ。

口の周りを試食のソースで汚している。

「あ、とーま！！ 半日ぶりなんだよ」

インデックスは上条に話しかけながらも、猛スピードで試食コーナーをめぐっていた。

そして彼女が通った後には山盛りにあった試食が一瞬でなくなっている。

「な、何してるんでしょうかインデックスさん・・・」

「とーますごいんだよ！！ この国にはお金を持ってない不幸な子羊を救うための制度『試食』があるんだよ！　すごいねとーま」

エメラルドの瞳を輝かせ天使のような笑顔を見せるインデックス。

いたずらな子供相手に百戦錬磨を誇る店員（上条談）も注意することができなくなっている。

「あー、そ、そうか。それじゃあ存分に楽しめ・・・上条さんはちよつと用を——」

ゆっくりと後ずさりをする上条の後ろにはすでに——いた。

「お客様？　このシスターさんの保護者なんですね？　そうなんですかね？」

殺気すら感じる店員の笑顔に上条はうなだれながら、

「はい。そうでございますですよ」

諦めるしかなかった。

「ご飯、ご飯、とーまがご飯を作ってくれる」

試食コーナーに置いてあった食材を一つずつ全種類買わされ、上条は両手に袋を持って帰り道を歩いていた。

「・・・はあ、ソーセージとウインナーとハムばかりどうしろって言うんだよ・・・」

上条の落ち込みなどまったく知る由もなく、インデックスはスキップしながら彼の少し前を歩いていた。

「とーまとーま」 この国も捨てたもんじゃないね」

嬉しそうな顔でインデックスが振り向く。

極上の笑顔に上条は思わず顔を赤くした。

「な、何ですか？」

（に、にやけるな、我慢だ俺っ！）

「だってね・・・最初この国、ううん、学園都市に来た時、誰も他人なんて見てなかったの。自分のことで精一杯って感じで・・・でもね」

上目づかいで上条に近づくインデックス。

「とーまは私に二度も親切にしてくれた。見ず知らずの私を助けてくれた。それは簡単にできるようでこの学園都市じゃとても難しいこと。それを簡単にできる人間が一人でもいるってことはとても素晴らしいことなんだよとーま」

（・・・ああ、そうか）

上条は気付く。

インデックスは今もなお何かに“追われている”。

そんな彼女が誰かに助けを求めることができるだろうか——いや、できるはずがない。

なぜなら、他人と関わることは、その人を巻き込むことになるのだから。

「とーま。美味しい料理作ってね？」

上条は思う。

この小さな、とても小さな女の子はどれほどの苦しみを背負っているのだろう。

異国の地で独り、理由も分からず命を狙われ、誰も頼ることができないなんて…。

「インデックス・・・、任せろ。全て俺に任せろ」

上条は覚悟する。

少女の重荷を少女ごと背負う。

そして必ずこの闇から救うことを。

「・・・？・・・ご飯の量も多くしてね？」

小首を傾げるインデックスの頭をばんぽんとなでると、上条は笑いかけた。

——滑稽ですね。

「……………!?!」

どこからか透き通った声が二人の耳に届く。

その言葉が何を指しているのか分からなかったが、“敵”であることは理解した。

そして上条は臨戦態勢を整える。

「…………滑稽だと言ったのですよ。あなたの覚悟が」

目の前に現れたのは——女だった。

左右非対称の服装、白いTシャツにジーパン（片方を極限まで短く切っている）。

上条当麻は確信する。

間違いない。この女は——痴女だ。

「とーま・・・逃げるんだよ。一心不乱に後ろを振り返らず逃げるんだよ」

インデックスの瞳が恐怖で満ちている。

こいつが。

目の前のこいつがインデックスを。

「私の名は神裂火織。イギリス清教・・・と言ってもあなたには分からない話ですね。今すぐその少女を引き渡しなさい」

神裂と名乗る女は、腰まで伸びた黒い髪を揺らしながら右手を差し出す。

おとなしくインデックスを引き渡せ、と。

「インデックス・・・これ持ってる」

上条はスーパーの袋をインデックスに渡した。

その意図は二つ、スーパーの袋を守ることと、インデックスを戦闘に参加させないことだ。

「とーま、お願いなんだよ。適うはずがないんだよ。相手は刀も持ってるんだよ」

インデックスの瞳が恐怖から不安の色に変わる。

目の前に自分の命の危険を脅かす相手がいてなお、他人の心配をするのか。

上条は拳を握り込み、口を開いた。

「よく分かったぜ、神裂。お前がそんなにインデックスの命が欲しいなら。こんな無力で怯えた子供を殺したいって言うのなら。まずはこの上条当麻が

——お前の幻想をぶち殺す!!」

第四章『聖人』その1（後書き）

こたつの上にインデックス 【第四回目】

上「とうとう出てきましたねおっぱいねーちゃん」

禁「けっ、とうまといい、作者といい、ちっぱいの魅力を分かっ
てないんだよ」

上「ど、どうしたんだ、インデックスさん」アセアセ

禁「あいつらは結局自慢の胸を披露したいがためにサイズの小さい
Ｔシャツを着たり、体操服の上着を肩に乗せて胸の部分は薄い体操
服で強調したりしてるんだよ！」

上（おっぱいの劣等感のせいでおさらインデックスも荒れてたのか・
・・）

上「・・・インデックス」

禁「なにかな？」ギロリ

上「お前は今でも十分魅力的だよ」キラリ

禁「・・・えっ／＼／＼」テレテレ

上「それにまだまだ成長期だ、（そんだけバカみたいに食ってれば）
その内あいつら顔負けのナイスバディになるさ（腹が出るだけの場
合もあるけどな）」

禁「・・・と、とうまのエッチ／／」デレデレ

小萌「では、先生はどうすればいいんですか上条ちゃん？」ニコッ

上「・・・・・・・・え」

小萌「私は成長期過ぎてますが未だに道具なしでブレーキが踏めません。どうすればいいですか」ニコッ

上「・・・・・・・・揉めば成長するかと」ワキワキ

女性陣『かみじょうとうま!!!!!!』

上「だああああ!! 不幸だああああ!!」

完?

空丸「えー、このたびはとてもうれしいことがありました」

空蝉「運命ちゃんがコメントを残してくれたことですね」フムフム

空丸「ええ!? 先に言っちゃう!？」

空蝉「感動して相手のプロフへ速効飛びましたこの人」

空丸「／／／／／／／／」テレ

空蝉「そのほかにも登録者数が増えていないか、何度も何度も確認したりしてましたこの人」

空丸「……………恥ずかしすぎてメガンテ撃ちたい」

空蝉「上条当麻の持ち味を生かしつつ、自分なりの世界観を溶け込まして、よりよい作品を創っていきますので、これからもよろしくです」

空丸「それ俺の台詞だよねっ!？」

空蝉「他にもコメント頂けたら、泣いて喜びます。いえむしろこいつ泣かせます」ゲシゲシ

空丸「だあああ！不幸だああああ!!！」

完

第四章『聖人』その2（前書き）

前回のおさらインデックス

上「今晚のおかずはソーセイジハムウイナーの盛り合わせ」

禁「楽しみなんだよ♪」

上「・・・・・・・・」

禁「どうしたのとうま？ 生ハムも欲しかった？」

上「さりげに高いものを追加するなあああ！！」

禁「そんなことはさておき、上VS神なんだよ♪」

上「原作じゃあっけなく負けたよな」

禁「でも、今回は幻想体現があるし、いけるんだよ→」

上「そうだな！！がんばってくるぜ！！」

禁・上「おっぱいのために！！！！」

第四章『聖人』その2

「——お前の幻想をぶち殺す!!」

言葉と同時に上条は神裂の目の前へ移動した。

今できる最速の幻想体現 イマジンプレイク。

これならどんな奴でも反応できないはずだ。上条は力強く右手を挙げる。

「食らいやが——え？」

しかし、上条の考えは完全に外れた。

虚をつかれたのは、自分だった。

「……七閃」

横から突き刺すような殺気に、上条は背筋を凍らせる。

（……人間がこんなにも殺気を出せるもんなのか!?!）

圧倒的優位な中で、神裂もまた動揺していた。

（今の動き、私と同等かそれ以上……。聖人の動きができるなんてこの少年は一体……）

動揺はあるものの、神裂は次の手に出る。

神裂は上条の動きを止められる程度の威力に落として七閃を放った。

それでも普通の人間なら簡単に気絶する威力だ。

振り下ろされる刀。

「いやああああ!!」

インデックスの叫びは刀と肉の触れる音でかき消される。

「………なっ!？」

間一髪だった。

上条当麻の人生において刀を相手にするのは初めてであり、軌道を読めるはずもなかった。

彼のとった行動は一か八か、いや一か百かくらいの賭けだ。

「なっ!？ 前に!？」

神裂の誤算は目の前の少年、上条当麻を一般の素人だと決めつけたことだ。

四肢がなくなろうと戦い続ける覚悟のないただの少年だと。

その考えが甘かったと気付いた時にはすでに彼女は宙へ浮いていた。——上条の拳によって。

「・・・はあはあ。この上条さんを甘く見てもらっては困るのですよ」

シャツの右肩が真っ赤に染まる。

覚悟がなければ簡単に意識を失う致命傷だ。

上条は全身の力が抜けていくのを感じた。

「いやあああああ！ とーま！ とーま！！」

インデックスが泣き叫びながら近寄ってくる。

「こらこら、そんな慌てたら袋の中身が飛び出しま——」

殺気。

殺気殺気殺気。

上条はどす黒い色——そう表現するしかない何かを感じた。

「・・・・・・・・・・Salvareooo（救われぬ者に救いの手を）

・・・・・・・・唯閃！！！！」

上条に襲いかかる無数の痛み。

「うあああああ！！」

上条はただ叫ぶことしかできず、宙を舞った。

同時に全身から血が噴き出す。

「あ……く、くっ……そ」

地面にたどり着いた時、上条の意識はもはや途切れかけていた。

「……なかなか手こずりました。

先ほどのあなたの行動は私の予測をはるか上にいきました。

なので仕方なく魔法名を名乗らせていただきました。

あなたがなおも立ち上がるというのなら、少女を助けるなどと戯言を言うのであれば、私は……あなたを殺す」

神裂は覚悟した。

この少年はもはや無関係の一般人などではない。

“私たちの計画”を破壊する恐れのある重要人物だ。

刀を握る力が必然的に強くなる。

「……く、くそっ」

上条の耳には神裂の言葉はほとんど届いていない。

届いていたとしても選択肢は一つしかなかった。

「……ま。駄目なんだよ。立ち上がったら殺されるんだよ……」

インデックスが泣いている。

上条もまた泣きそうな顔で答えた。

「・・・ごめんなインデックス。他人のことばかり考えるお前をまた悲しませるかもしれない」

そして、上条当麻は立ち上がる。

「さて、続きだ、神裂火織」

傷の痛みなどまったくないかのごとく力強く。

「なつ、痛みで立ち上がることはおろか喋ることすらできないはず」

実際、痛みはそれくらいあるのだろうか。上条は苦笑する。

痛みを消しさる幻想を体現している彼にはどれほどの苦痛が分かっていなかったのだ。

「お前・・・それだけ強くて、それだけ正しい目をしていて、なんでだよ。インデックスは普通の女の子じゃないか。お前の中にそれを許せる心なんて存在してないはずだ・・・違うか神裂！！！」

悲しみに満ちた瞳。

何があっても目的を遂行する強い意志。

上条は理解していた。

彼女がインデックスを襲うことには理由があり、それがいかに彼女自身を苦しめているのかを。

「・・・さい」

一方、神裂の中で黒い何かが弾けた。

それは迷いであり、悲しみであり・・・怒りであった。

「うるさい！ この素人があああああ！！！」

聖人である自分が七閃を使うことは、人間の枠を超えた動きを許可することであり、何度も使えば肉体にダメージが来ることは理解していた。

しかし、使う。

この少年だけは、上条当麻だけは何が何でも倒す。

完膚なきまでに、“自分が正しいこと”を証明するために。

（ああ、なんてつらそうなんだ・・・）

上条にとって、もはや神裂は敵でなかった。

彼女もまた何かに苦しみ、戦い、もがいている。

そして、神裂火織は自分の言葉を引き金に――暴走した。

「・・・待つてろよ、神裂。お前のいる世界を知らないが、お前の苦しみの正体を知らないが、お前の希望を知らないが、俺はお前と一緒に救ってやる！！！」

上条は強く幻想する。

身体全体で七閃の軌道を解析し、その後来るであろう唯閃を脳で予測し、神裂の力を奪い取る。

——そんな夢のような幻想を体現するために。

「なっ！！？」

神裂は驚き以上に恐怖を感じた。

魔法名を名乗り魔術で強化された七閃唯閃をかいくぐる人間がいることを。

そしてその少年は卒倒するような傷を負っていることを。

「くらえええええ——えっ？」

その時——この場にいるもの全員にとって予想外のことが起きる。

上条にとつては目の前にインデックスが現れたこと。
その時は魔法と呼ばれる全ての異能を無効化する幻想を体現した。
そしてインデックスの背中に触れる。

インデックスにとつては“歩く教会”が作動しなかったこと。
神裂の刀をまともに受けて痛みで卒倒する。

神裂も同様に“歩く教会が作動しなかったこと”が予想外だった。
彼女を全てから守り、傷一つつけないことを誓った自分がインデックスを傷つけてしまった。

そして、インデックスは背中から仰向けに倒れる。

肩から腰にかけて一直線の刀傷ができている。

「あ、あ、あああああああああ！……！」

その場に崩れる神裂。

インデックスを守る——彼女を支えていた根幹が折れてしまったのだ。

「い、インデッ……クス」

上条もまた地面に突っ伏した。

意識が途切れ途切れになる。

とつくに限界は超えていたのだ。

タイミング悪く、いや、この場合とてつもなく良かったのかもしれない。

「やれやれ、なんて様なんだ、神裂火織。聖人が泣いていたらいつたい誰が救いの手を与えと言っんだい？」

啞えタバコを捨て、夕日より赤い髪をかきながら、男——ステイルⅡマグナスは現れた。

「……ま、待て……」

上条は体中に残ったわずかな力をかき集め、右手をステイルに向ける。

「……ん？ ああ、君か？ 無関係な人間は——そこでくたばれ」

最後の言葉を聞くまでもなく、上条当麻は気絶した。

——誰一人救うこともできずに、気絶した。

第四章『聖人』その2（後書き）

こたつの上にインデックス

上「いやあー、これもまたオリジナル展開だよな。神裂と俺が戦うのは原作に近いけどさ」

禁「とうまはかつこ良かったんだよ！ それに比べてアニメで私のことを“これ”扱いしたあいつの空気つぶりったらもう・・・」ジ
トー

ス「ちよっ！ 僕のこと覚えてないからってひどい扱いはやめてくれよ！」

神「上条当麻・・・／＼」ポォー

禁「おっぱいがまたとうまの餌食に・・・」

上「誤解を存分に含む言い方やめてー！！」

ス「さすが猿だな。おっぱいを口にふ、含むなんて／＼」

禁・上・神

「ステイル、マジで引くわ。退場」

ス「えええええ！？ ひどいよ・・・グスン」スタスタスタ

神「そういえば上条当麻。この場合、私の勝ちで良いんですね？」

上「俺は別に勝ち負けにこだわってないし、神裂の判断に任せるぜ」

神「・・・／＼　　そ、それじゃあビリビリルにのっとして、
上条当麻は一日私の好きなようにしていいんですね・・・」

上「……ダッシュ！」

禁・神「あ、逃げた・・・」

完？

空丸「みんながコメントくれて嬉しいよう（つД・）」

空蝉「よしよし、いいこいいこ」 ナデコナデコ

空丸「珍しく空蝉が優しい（（（（（。；Д））））ガクガクブルブル」

空蝉「大丈夫、みんなお情けだから」

空丸「うおおおおおい！！！！禁句、それ禁句だから！！！！」

だんだんキャラが銀魂の神楽ちゃんみたいになってきたな・

空蝉「え？ きゃんたま？」

空丸「うおおおおい！！！俺をぱっつぁんにすんなよマジで！」

空蝉「でも、本当に当人飛び跳ねて喜んでいますのでこれからも暖かい応援してくださいね」ニコッ

空丸「……お前がいうな」

完

第五章『共有』（前書き）

前回のおさらインデックス

禁「私のお腹がぽぽぽん（´、*）」

上「俺の全身がさよなライオン（´、`）」

神「あわわわわ、どちらも私のせいで」ドゲザ

禁「大丈夫なんだよっ！」

上「そうだぞ神裂！ 大丈夫だっ！」

神「ふ、二人とも…」ウルウル

上・禁「後でパフェおごってもらうからなっ」「

神「……………」

士「やっと今回おれの出番にゃー」

禁「それじゃあ、楽しんでみるんだよ！」

第五章『共有』

いつからだろう。

いつから幻想するようになったのか。

いつから体現するようになったのか。

いつになったら体現できるのだろうか。

いつになったら・・・。

「・・・ここは？」

見覚えのある和室。

部屋の隅にはビールの空き缶が溢れている。

灰皿には無数のたばこがひしめいていて、上条はここがどこか気
付く。

「上条ちゃん・・・大丈夫ですか？」

ああそうだ、小萌先生の部屋だ。

上条当麻は安堵した。

ウサギのパジャマ（小学生用）を見事に着こなし、不安そうに覗き込んでくる成人女性に上条は思わず吹き出した。

「あー！ 今私のことを幼稚園児だと思いましたね！ 仏の小萌も許せることと許せないことがあるんですからね、ぷんぷんっ」

「あはは、小萌先生（の服）があまりに可愛かったので、思わず笑っちゃいました」

「・・・っ、し、式がイコールで結ばれないのですよっ！！」

ぶいっつと、顔を真っ赤にして横を向く小萌。

その理由を上条が理解することはない。

「かーみやーん♪ 俺のことを無視したら悲しいにやー」

土御門元春はいつもの調子で上条に話しかける。

金髪にサングラスとチンピラの原型のような姿をしているが、れっきとした高校生だ。

「土御門・・・、ああ、そういうことか。すまん」

上条は土御門が自分の胸を右手で押さえているのを見て事態を把握する。

「それにしても、上条ちゃんのこの能力は長年能力研究してきた私でも理解不能です。他人の能力を共有するなんて」

上条当麻には幻想体現が生んだイレギュラーな能力があった。

他人の能力を共有し個人で発動することができる。

身体のだこかが触れ合っていること、知り合い以上の関係であることなどの発動条件はあるが。

「本当は抱き合ってるほうが威力強いんだにゃー。でも小萌ちゃんが止めるから止めてあげたにゃー」

確かに、触れ合っている面積が大きいほど上条の使える威力は増す。

が、この時ばかりは心の底から小萌に感謝した上条がいた。

「それにしてもかみゃんは昔から本当に傷が絶えないにゃー。その度に駆り出される身にもなってほしいにゃー」

すまん、上条は一言謝ると全身に力を入れて起き上った。

傷の痛みはあるが動けないほどではない。土御門の再生能力のお陰だ。

「む、無理しちゃだめなのですよー。肉体は再生しても、寝ている間も能力を使用したのだから体力は回復してないのですよー！」

泣き顔で訴える小萌の頭をなでながら上条は立ち上がる。

「・・・行かなきゃ」

上条には理由があった。

「ちょっと、女の子を二人助けられます」

そして上条は幻想を体現し、その場を去った。

「やっぱり女の子なんですネ。上条ちゃんは・・・」

少し悲しそうな小萌に土御門は笑いながら答える。

「大丈夫、小萌先生には青髪ロリコンがいるにゃー」

その冗談は笑えません。と、小萌が笑顔に戻る。

（それにしても・・・あそこにはかみやん以外の血があっただけど、
一体だれの・・・）

土御門はサングラス越しに過去を予測するが、結局想像でしかない。

すぐに諦めた。

第五章『共有』（後書き）

こたつの上にインデックス

土「え、俺の出番これだけぜよ!？」

神「そうです。あなたなどそれだけで十分です」

土「ねーちんそれはひどいぜよ」ウルウル

神「あなたの泣き落としなど私に通じる訳がないでしょう!」カッ

上「神裂く、土御門は良い奴なんだあ・・・、許してやってくれ」
ウルウル

神「・・・し、仕方ないですね。許してあげます／＼／＼（泣き
とつま可愛い／＼／）」

土「・・・なんで俺が謝罪してることになってるんだにや・・・
不幸だあ!!!!」

空丸「いよいよ大詰め! 最終章に入ります!」

空蝉「とっても短かったね!!」

空丸「いいの!! 人物像とか因果関係は脳内補てんで許して!!」

空蝉「そんなことで本当にジャツジメント編へ行けるの・・・？」

空丸「空蝉に心配された！！？」

空蝉「一応シナリオはできてるみたいだけど、なんていうか執筆できてないよ最近」

空丸「（´・ω・｀）ウッ…」

空蝉「応援してくれてる皆のためにも頑張ろう？。」

空丸「（つДこ）ワカッタ」

空蝉「がんばるんでこれからも豚をよろしくお願いします！」

最終章『全ての終わり』（前書き）

こたつの上にインデックス 前書編

禁「寝てたんだよ！」

上「ああ、俺らの物語を放って寝てた」

禁「しかも17時間も！」

上「ああ、あいつは能力者だな。『過剰睡眠』だ！」

空丸「……申し訳ありませんでした」

禁「まあ、そんなことより楽しんでみるんだよ！」

最終章『全ての終わり』

いつからだろう。

いつから幻想するようになったのか。

いつから体現するようになったのか。

いつになったら体現できるのだろうか。

いつになったら・・・。

「・・・ここは？」

見覚えのある和室。

部屋の隅にはビールの空き缶が溢れている。

灰皿には無数のたばこがひしめいていて、上条はここがどこか気付く。

「上条ちゃん・・・大丈夫ですか？」

ああそうだ、小萌先生の部屋だ。上条当麻は安堵した。

ウサギのパジャマ（小学生用）を見事に着こなし、不安そうに覗

き込んでくる成人女性に上条は思わず吹き出した。

「あー！ 今私のことを幼稚園児だと思いましたね！ 仏の小萌も許せることと許せないことがあるんですからね、ぶんぶんっ」

「あはは、小萌先生（の服）があまりに可愛かったので、思わず笑っちゃいました」

「・・・っ、し、式がイコールで結ばれないのですよっ！！」

ふいっと、顔を真つ赤にして横を向く小萌。その理由を上条が理解することはない。

「かーみやーん、俺のことを無視したら悲しいにゃー」

土御門元春はいつもの調子で上条に話しかける。

金髪にサングラスとチンピラの原型のような姿をしているが、高校生だ。

「土御門・・・、ああ、そういうことか。すまん」

上条は土御門が自分の胸を右手で押さえているのを見て事態を把握する。

「それにしても、上条ちゃんのこの能力は長年能力研究してきた私でも理解不能です。他人の能力を共有するなんて」

上条当麻には幻想体現が生んだイレギュラーな能力があった。

他人の能力を共有し個人で発動することができる。

身体のどこかが触れ合っていること、知り合い以上の関係であることなどの発動条件はあるが。

「本当は抱き合ってるほうが威力強いんだにゃー。でも小萌ちゃんが止めるから止めてあげたにゃー」

確かに、触れ合っている面積が大きいほど上条の使える威力は増す。

が、この時ばかりは心の底から小萌に感謝した上条がいた。

「それにしてもかみゃんは昔から本当に傷が絶えないにゃー。その度に駆り出される身にもなってほしいにゃー」

すまん、上条は一言謝ると全身に力を入れて起き上った。
傷の痛みはあるが動けないほどではない。土御門の再生能力のお陰だ。

「む、無理しちゃだめなのですよー。肉体は再生しても、寝ている間も能力を使用したのだから体力は回復してないのですよー！」

泣き顔で訴える小萌の頭をなでながら上条は立ち上がる。

「・・・行かなきゃ」

上条には理由があった。

「ちょっと、女の子を二人助けられます」

そして上条は幻想を体現し、その場を去った。

「やっぱり女の子なんですね。上条ちゃんは・・・」

少し悲しそうな小萌に土御門は笑いながら答える。

「大丈夫、小萌先生には青髪ロリコンがいるにゃー」

その冗談は笑えません。と小萌が笑顔に戻る。

（それにしても・・・あそこにはかみやん以外の血があっただけど、一体だれの・・・）

土御門はサングラス越しに過去を予測するが、結局想像でしかない。すぐに諦めた。

第七学区の廃ビルの一角。そこは普段ならお化けビルとして恐怖の対象とされるのだが、今は誰も気にせず通り過ぎていた。

ステイルの魔術でこのビルの存在を“消し去った”からだ。

「一体どうすれば・・・」

神裂は自分の無力さを呪った。

「はあはあはあ・・・」

神裂の目の前には包帯に巻かれた少女が横たわっている。

傷は深くこのままでは少女の命を脅かすことにもなりかねない。

「僕の魔術で治してやる・・・と言いたところだけど、残念ながら応急処置しかできなかった。学園都市の病院はIDのないインデックスは診てもらえないだろう」

ステイルもまた悔しさに満ち満ちている。

それでも冷静さを失わないのは取り乱したところでインデックスを救えないことを心から理解しているからだ。

去年、泣き喚き、取り乱した自分はもういない。

「結局、私たちの選択は正しかったのでしょうか」

「インデックスを追いかけてこすることがかい？ それとも彼女の記憶が消えなくてもいい方法を探すのを諦めたことかい？」

ステイルは不機嫌そうに言った。

彼自身何度もその疑問にぶつかり、悩み、今もなお苦しんでいるからだ。

「両方ですが、今はインデックスを追いまわす方法をとったことです。たしかに一年ごとに記憶が消える彼女にとって楽しい記憶であふれさせることは最後に辛い思いさせることとなります。ですが、苦しい思いを積み重ねたところで、最後に辛い思いが軽減されたところで、彼女が幸せだとは・・・思えないのです」

神裂は思い出す。去年、楽しそうに笑うインデックスを。最後に『忘れたくないよ力オリ』と言いながら記憶が消えてしまったインデックスを。

「彼女が完全記憶能力を有し、禁書目録として選ばれている以上、多くの苦しみは背負わなくてはならない。だから僕らも彼女とともに苦しむ。そう決めたんじゃないのか、神裂火織」

ステイルの睨みに神裂は目をそらす。

彼がどれだけ苦しんでいるのか分かった上で自分は愚痴をぶつけたのだ。これじゃあ聖人でもなんでもない。

神裂は地面を強く殴った。

「……いずれにせよ、このままじゃインデックスが死ぬ。医者脅してでも何とかしない——」待てよ」

ステイルも神裂も驚きのあまり立ち上がった。このビルは完全に世界から切り離されていたはずだ。

「これが魔術か。本当に便利なんだな」

上条は鼻をさすりながら歩み寄る。

「いったい……どうやって、魔術師のお友達でもいるのかい？」

ステイルの質問に上条は笑いながら答える。

「いやいや、上条当麻は腐っても化学側の人間。魔術師の知り合いなんてインデックスとあんたたちくらいだよ」

そして上条は説明を始める。

「第七学区にいることは分かっていたんだ。傷だらけのインデック

スを連れまわすことはないだろうし。でもいくら探してもいない。で、気付いた訳よ『ああ、魔術なんかで消えてるんだな』って。こればかりは賭けだったけどな。もしレポートみたいな魔術があつたら終わりだし」

上条は続いておでこをさする。

「・・・質問の答えになっていないと思うんだけどね」

ステイルは苛立ちを隠せない。いつそ魔術で殺してやろうかとさえ思っていた。

「ああ、そうだな。答えはこれさ」

十メートルくらい離れていた距離を上条は一瞬で詰めた。

「第七学区を直線上に走り回っただけさ。そして何もない場所では何かにぶつかった。そしてそれが建物だと分かった。もちろん、常に魔術を消す力を使っていた」

ステイルと神裂は呆れていた。われわれが転移魔術でイギリスに帰っていたらこの男は一日中この学園都市を往復し続けたというのか。

「は、はははっ！ 猿の考えることは僕には一生涯理解できそうにない！」

皮肉を言いながらステイルは右ポケットからカードを取り出す。ルーン文字が書かれているそのカードは彼が魔術を使うのに必要不可欠なものだ。

「ちょっと待て、俺はお前らと戦うつもりはない。・・・インデックスを治しにきたんだ」

そして上条当麻は説明する。

自分には能力を共有する力があること、そしてたった今肉体再生の能力を共有したことを。

「時間がないんだ。一度共有した力は離れてもしばらく使えるけど、そう遠くないうちに消えてしまう」

魔術側の二人にとって、学園都市の能力など何一つ信じられなかったが、選択肢が多くないのも確かで、その中で一番手早く行えるものではあった。

「・・・分かりました。上条当麻。命がけで彼女を守ろうとしたあなたを信じます。・・・が、もし助けられなければ私はあなたを斬ります」

神裂の言葉が嘘であると上条はすぐに気付いた。それはたった今試している。もし神裂の言葉に不安の色を見せれば、別の方法を選択するつもりだ。

「信じてくれ神裂。俺はお前のことも助けたいんだ」

真剣なまなざし。

「なっ・・・」

斬られた相手を助けたいなどと。神裂は心臓の高鳴りを感じた。目の前の頼りなさげな男に身をゆだねたい。そう感じたのだ。

「・・・で、実行するにあたってなんだけど。まずステイルとかいうお兄さんはこの場から離れてくれないかな？」

上条の言葉にステイルは激昂した。

「なぜだ！！ 僕はインデックスのためなら死ねる！ 彼女が死にそうな時になぜ離れなければいけないんだ！！」

「いや、だって・・・今からインデックスは裸になるし・・・」

その言葉にステイルと神裂に再び敵意が溢れる。

「ちよちよちよっ！ だって仕方ないだろ！ インデックスの服は異能の力を防御するんだろ？ だったら俺の力を防がれるかもしれないじゃないか！ それに、俺の能力は触れ合う面積が広いほど、また密着度が高いほど能力の威力が高まるんだよっ！」

そして上条は服を脱ぎ捨てる。神裂は顔を真っ赤にして目をそむけるが、ステイルは彼を見て絶句した。

上条の上半身は先ほどの神裂につけられた傷以外にも無数の傷があった。

普通なら生きられるわけがないような大きな傷もある。

どれほどの修羅場をくぐりぬければそうなるのか。

ステイルはたばこを吐き捨て踏みつぶすと、部屋から姿を消した。

「・・・え、えーつと、神裂さん。俺みたいな身体を見るの嫌でしょうけど、あなたにはインデックスを脱がして俺をインデックスのところまで案内する役目があるのですが」

上条さんは紳士なので、目をつぶっています。そう言っ上条は目を閉じた。

「・・・えっ？ えっ？ ええ！？」

状況を理解した神裂はただただ慌てることしかできなかった。

「で、できました上条当麻。さ、こちらへ」

インデックスを裸にして上条当麻をそこへ案内する。

それだけのことが神裂には手間取ってしまう。

未成年の彼女は未だ男性の裸はおろか手さえ握ったことはないのだ。

恥ずかしさで爆発してしまいそう。

神裂も目をつぶってしまいたいと思っていた。

しかし、実際目の前に上条の身体があると、思わず見入ってしまう。

傷だらけの身体は思った以上に華奢で、そんな触れたら壊れそうな上条当麻は聖人である私を救いたいと言ったのだ。

神裂の心にゆっくりと上条が浸透していく。

無事上条をインデックスの前に座らせると、神裂はインデックスを抱えあげ、上条の膝の上に置いた。

ちやうど恋人がテレビを見ながらいちやっっているような大勢になっている。

（・・・うらやましいかも。・・・はっ、いけませんいけません／＼）

神裂は自分の心に生まれた邪念を、首を振ることで必死に消そうとした。

（インデックスの傷を回復することに全力をかけるんだ・・・）

本来、土御門の肉体再生は現在上条に作用していた。

それをインデックスに移すということは、必然上条の身体は傷の回復をやめる。

「くっ・・・くう・・・」

上条の身体から血が溢れだす。

「な、なんで!？」

神裂は慌てた。

上条の説明はインデックスを治すことであり、自分が傷つくことではなかった。

そしてその傷がなんであるか気付く。

「私の・・・せい」

神裂が傷つけた少女を癒すために神裂が傷つけた少年が傷を負いながら犠牲になっている。

「はあはあ・・・いいんだ、神裂。これは俺が選んだこと。誰のせいか決めるなら間違いなく俺のせいだ」

目を閉じたまま、意識をインデックスに向けながら、神裂のことを気遣う。

上条当麻という男の本質に、神裂は涙を流す。

聖人が涙を流していた時、上条当麻はとてつもない不安に心を押しつぶされそうになっていた。

インデックスに土御門の能力を与える一方で、上条の幻想体現はインデックスの“力”を共有しはじめていた。

「かみじよ——」「なつ、なんだこれ!？」

神裂の言葉を待たず、上条の身体がびくんと跳ねた。

神裂は気付く。

「インデックスの目に魔術式が!？」

『接触している人間に魔術書が複写される可能性を感知。ただちに迎撃し危険を回避します。』

——自動書記、ヨハネのペン起動』

神裂は戦慄した。

少女は魔術を使えないはずだ。

ならば目の前の少女から溢れだす魔力と魔術の構成術式はなんだ。

「上条当麻！ 危険です！ 今すぐ離れなさい！」

予想外だった。

まさか自分が上条の安否を気にするなんて。

神裂は自分の心の変化に戸惑った。

「駄目だっ！！ あと少しで傷が完全に消えるんだよ！！」

「それほど回復しているなら大丈夫です！」

神裂の言葉に上条は優しく答える。

「・・・ばかやろう。女の子の身体に傷跡なんて残せねーよ」

『——』

インデックスから冷たい声が漏れ出ているが、上条は五感を遮断してインデックスの治療に集中した。

（後・・・一分）

「いけませんっ！」

神裂は上条を無理やりひきはがし距離をとる。

「何すんだよ、神裂！ 後、いっぷ……ん？」

上条の視界にはとてつもなく巨大な――穴があった。

「竜殺しの息吹か……なんて厄介な」
ドラゴンブレス

いつの間にかステイルも横にいた。
なぜか視線を下に向けて顔を真っ赤にしている。

「何やってんだ、ステイル！ そんなんじゃ攻撃を避けられ……
！？」

そこには宙に浮く裸体の少女がいた。

「……か、上条さん、知らなかったたのでござりまするよ」

「次、来ます……！！」

巨大な魔術式が展開され、そこから凝縮された光がレーザー光線のように放たれる。

「くっ！ うおおおおお！」

上条は一步前に踏み出す。

ドラゴンブレスを止めるイメージはわからない。……しかし、受け流すならっ！ 右手を突き出してレーザーを迎え撃つ。

想像を絶する衝突が起きた。

レーザーは上空に軌道を変える。

上条当麻が捻じ曲げたのだ。

レーザーが通った上空から光輝く白い羽根が無数に降ってくるが、まだ三人とも気付いていない

——それが何を引き起こすものなのか。

「な・・・、最高位魔術を素手で捻じ曲げるなんて」

この男がいれば何とかなるのかも。

ステイルの中ではんの小さな希望が芽生え、そして上条の言葉で打ち消される。

「・・・次は無理だ。二人とも逃げろ」

上条の言葉を神裂は否定し、ステイルは笑いながら答えた。

「これだから猿は物覚えが悪いと馬鹿にされるんだ。僕たちは彼女のために生きている。それなのに逃げるなんて選択肢があると思っているのかい」

そして、三人は笑い合う。最後の覚悟を決めたのだ。

「ステイル、お前は何か使えるのか知らないが全力でさっきのを迎撃してくれ。神裂、こっちへ」

言われるがままステイルは魔術を構成する。

神裂は上条の前に立った。

「神裂、お前が今後誰かを好きになってそいつと結ばれた時、今から起きることを後悔するかもしれない。だけど、・・・許してくれ」

「・・・何を——！？」

上条は神裂を抱きしめた。

唇が触れ合うほど強く密着している。

「・・・か、かみじょうとうま・・・」

神裂は顔を真っ赤にし、まともな思考力を失いかけていた。

そこへ上条がささやく。

「神裂・・・跳ぶぞ」

そして、上条と神裂はその場から——消えた。

上条は神裂の聖人としての能力を共有し、使用した。

ステイルの最大にして最高の魔術『魔女狩りの王イノケンティウス』はドラゴンブレスをまともに受けながらも善戦していた。

もともとルーンカードを張り巡らして使う魔術であり、即席の魔術など本来の十分の一も発揮できていないのにも関わらず。

『目標の移動を確認。ただちに「遅いんだよっ！」』

聖人の力で強化された上条の右手がインデックスの頭を掴む。

そして幻想する。

少女に降りかかる全ての悪意を打ち消すことを。

少女の中に巣くう全ての悪意を打ち消すことを。

少女の世界に矛盾なきことを。

「インデックス。飯食いに帰ろうぜ」

上条の声と同時に、インデックスは崩れ落ちた。

終わったんだ。

上条当麻は安堵した。そして、それはまだ早かったことを知る。

「上条当麻！！ その羽根に触れてはいけない！！！」

降り注ぐ白い羽が、たった今到達したのだ。——標的の頭へ。

「・・・あっ」

そして、上条当麻は崩れ落ちた。

最終章『全ての終わり』（後書き）

空丸「ごめんなさい、誤字脱字あると思います。ほとんど見直しな
しました。次のエピソードでインデックス編は最後です。もう少し
なので見捨てずお付き合いお願いいたします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3176ba/>

とある普通の能力少年。

2012年1月13日15時51分発行